

回答・元玉川大学教職サポートルーム客員教授 峯岸 誠

第2回 地歴並行学習の工夫・改善



学習指導要領では、1・2年生で地理的分野と歴史的分野を並行して学習させ、3年生で歴史的分野と公民的分野を学習させるとしています。そのねらいは何ですか。また、指導計画作成の考え方を教えてください。



(1) 地歴並行学習のねらい

地理的分野と歴史的分野を並行して学習させ、そのうえで公民的分野を学習させる形態をパイ型学習とよびます。これは、3分野をギリシア文字の π の各部になぞらえての呼称です。また、地理的分野と歴史的分野を並行して学習させることを地歴並行学習といいます。パイ型学習と地歴並行学習は中学校社会科の基本的な構造です。

地歴並行学習の萌芽は、1958（昭和33）年改訂の学習指導要領にみることができます。そこでは、特例として地歴並行学習を示し、公立学校では教育委員会の承認を必要としました。

地歴並行学習とパイ型学習を原則としたのは、1969（昭和44）年改訂です。この改訂から「政治・経済・社会的分野」が「公民的分野」と改められました。そこでは、次のように示しています。

第2節 社会

第3 指導計画作成と各分野にわたる内容の取り扱い

2 指導計画の作成に当たっては、地理的分野および歴史的分野の基礎の上に公民的分野の学習を展開するこの教科の基本的な構造にじゅうぶん留意しなければならない。

3 各分野の学年配当については、第1、第2学年を通じて地理的分野と歴史的分野を並行して学習させ、第3学年において歴史的分野および公民的分野を学習させることを原則とするが、（以下略）

地歴並行学習のねらいを中学校指導書社会

編（現在の学習指導要領解説）は、次のように示しています。

（略）第1、第2学年を通じて、地理的分野と歴史的分野を並行して学習させるいわゆるパイ型学習のもつ長所、つまり

- ① 生徒の意識、能力などの発達段階に即して、継続的に学習させることができること。
- ② 生徒の意識、能力（技能を含める。）などを継続的に伸長させることができること。
- ③ 地理的分野および歴史的分野の学習成果を、それぞれ公民的分野の学習に直接結びつけることができること。
- ④ 3分野が相互に補い合い深め合いながら、教科全体としての学習効果を高めることができること。

これらから、地歴並行学習のねらいが学習内容の継続性をはかりながら、生徒の発達段階に応じて意識や能力、技能の伸長をはかることにあることがわかります。また、3分野がそれぞれ独立した学習ではなく、相互にその成果を活用することが求められています。

(2) 地歴並行学習の実際と課題

地歴並行学習のねらいに応じた授業を展開するためには、指導計画の立案にあたっての工夫が必要となります。このことについて、前述の中学校指導書社会編は、次のように示しています。

（留意事項）

(5) 各分野の学習は相互に緊密な関連を保って、各分野の個性を発揮しながらも、それぞれ孤立した取り扱いにならないよう配慮すること。そのため、3か年間の指導の見通しをつけ、その見通しのもとに、各分野、各学年の指導計画を作成して、相互の有機的な関連を図り、指導の発展の筋道を明らかにしておくこと。

社会科の学年別配当時間が偶数であれば地理的分野と歴史的分野を年間通して並行して学習させることは可能です。しかし、現行の学習指導要領では、第1、第2学年ともに週3時間の配当ですから、厳密な意味での並行学習は難しくなっています。実際はどのようになっているのでしょうか。ベネッセ教育総合研究所が毎年実施している調査から全国的な傾向を知ることができます。概況として、地歴並行学習の実施率は92%以上となっていま

す（『中学校の学習指導に関する実態調査報告書 2014』）。状況は次の通りです。

方法	1年生	2年生
1週間の授業時間で地歴を扱う	6.1%	5.8%
1～2週間で地歴を交互に扱う	0.5%	0.3%
月や単元ごとに地歴を交互に行う	67.5%	67.3%
定期テストごとに地歴を交替する	8.9%	9.1%
学期ごとに地歴を交替する	3.2%	4.5%
前期、後期に分け地歴を交替する	13.7%	12.9%

いずれも長短それぞれありますが、地歴並行学習のねらいや生徒の学習負担、教師の教材研究の負担から次のようなことがいえます。

- ①月、単元、学期ごとなど機械的に交替を行うのではなく、発達段階に即して、継続的な学習が望まれる。
- ②生徒の学習負担や教師の教材準備を考えると、月、単元、学期ごとなど機械的な交替ではなく、内容的な継続的学習が望ましい。
- ③小規模校が増加し、社会科教員が1校に1人もみられる。3学年、複数分野の指導はひじょうに困難がある。そこで、指導分野を集約することが望ましい。

以上から、次のような指導計画を考えてみました。

時期	内容
1年前期	歴史の流れと時代区分 古代国家の成立と東アジア
1年後期～2年前期	世界のさまざまな地域 日本のさまざまな地域
2年後期～3年(40時間)	武家政権の成長と東アジア 武家政権の展開と世界の動き 近代国家の歩みと国際社会 現在に続く日本と世界
3年生(100時間)	公民的分野

※ 「内容」は帝国書院版の教科書の単元名

この指導計画の特徴は次のところにあります。

- ①歴史的分野を1年生の前期に設定することにより小学校の学習の成果が活用される。
- ②地理的分野を連続して学習することにより学習の継続性がはかられ、意識、能力の伸

長が期待できる。

- ③地理的分野を学習することにより、生活の舞台としての地理的認識が養われ、歴史的事象への理解が深まる。
- ④歴史的分野の学習を2年生と3年生で連続させることにより、現代社会の特色等の理解がうながされる。

(3) 指導計画作成の考え方

地理的分野の「日本の姿」、「世界と比べた日本の地域的特色」、歴史的分野の「現在に続く日本と世界」、公民的分野の「私たちの暮らしと国際関係」の内容は相互に深い関連があります。

公民的分野の導入として「私たちと現代社会」の単元が設定されました。「私たちと現代社会」は地理的分野と歴史的分野の学習の成果を活用する学習の展開が求められます。「私たちの現代社会の特色」に含まれる少子高齢化、情報化、グローバル化はいずれも地理的分野の「世界と比べた日本の地域的特色」で取り扱っています。同じように「私たちの生活と文化」の内容については、歴史的分野の各時代の文化や「宗教の誕生と広まり」とかかわりがあります。

したがって、**地理的分野と歴史的分野の指導にあたっては、公民的分野つまり現在の社会的事象との関わりを意識して計画、指導する必要があります。**ロシアとウクライナの問題はその典型でしょう。

このことを、中学校学習指導要領解説社会編では「各分野相互の関連を図り、第1学年から第3学年までを見通した全体的な指導計画を作成し、全体として目標が達成できるようにする。」と示しています。

このように分野および単元相互の関連をはかり、3年間を見通した指導を進めることが大切です。